

はじめに

唐突ですが、昨今「政策」という言葉をメディアでみない日はありません。とりわけ、総選挙だ、そしてさあマニフェストだ……といった文脈のなかで。しかし、二言目には「政策」を持ち出したがる側の人々のなかに、時として党利党略やさらには語弊を恐れずにいえば、選挙に通るために、本音としての私利私欲を隠して「国民のため」と声高に叫ぶ人もいるかもしれませんね。「政策」は「政治家」の独占物ではありませんし、それを私利私欲実現のために手段化しては、決して国も国民も幸福になることはできません。

政治屋ではなく、本物の政治家を選ぶことはもちろん僕たち国民の責務であり、また私利私欲化した人たちを議会に送り込んでしまったとすれば、それもまた僕たち国民の責任でもあるわけです。「政策」を学ばなければならぬ大きな意味のひとつは、そこにあるような気がします。そして、いかなる「政策」であっても、その本質が「公共政策」である以上、僕たちのように普通に普通の人々（本文で登場する柳田國男¹がいう「常民」に当たる人々）の公益を守り、その福祉水準（すなわち、文化と経済のバランスがとれた豊かさ²と幸福度）を向上させるものでなければいけません。ただし、「公共政策」といつてもその主体となる担い手は、国家や自治体（都道府県から基礎自治体まで）・公共団体だけの専有物ではありません。とりわけ、この本が扱おうとする文化や芸術、ま²ちつむぎ²と観光などにおいては、それが強いいえそうです。

ところで僕は現在、京都御苑のすぐ北に位置する同志社大学の政策学部で教鞭をとっています。まさに「政策」を学ぶための学部です。一〇年ほど前に、この学部が生まれた当初、とりわけ受験生の人たちの間では、

「政策」を学ぶということのイメージが捉えにくかったのかもしれませんが。また僕は、しばしばゼミの学生たちと地方の都市や農村のフィールドに出ることがあります。ずいぶん以前のことになりますが、山陰地方のある農村で一緒に畑仕事をしていた地元の中年の男性から、「セイサク学部って、何をつくってるの？」と尋ねられたこともありました。それは「制作」か「製作」と誤解されたわけですが、党利党略的「政策」のイメージのみが、僕たち現代に生きる「常民」にはあまりに強すぎるが故の、ひとつの証左だったのかもしれませんが（少しネガティブな証左かもしれませんが）。ただ「つくる」ということでは、「政策」を学ぶことの大きな意義として、自立というよりもむしろ自律的な「常民」を「つくる」（育てる）ことがあることはいうまでもありませんが。柳田はその学問を通して、その必要性を生涯に渡って訴え続けました。

僕は、大学では主として「文化政策」と「観光政策」を担当しています。「文化政策」の考え方は多様ですが、「観光政策」の捉え方はそれ以上に多様多彩です。以前よく「一〇人の社会学者がいれば、一〇の社会学がある」といわれたことがあります。「文化政策」も「観光政策」もそれに似たところがあり、また定理定則があるわけでもないし、「経済学原論」のような原理論があるわけでもないの、とりわけこれらの政策は、両刃の剣になりがちです。もちろん、他の政策分野においてもそれが例外ではない部分もあるでしょうが。

他の政策においても例外でないことといえば、そこにおいては、「フィロソフィー」を持ち豊かな「詩心」と「誌心」³として「史心」³を忘却してはいけないということです。「文化政策」と「観光政策」においては、特に三つの「心」と「フィロソフィー」がコアカリキュラムだと思っています。

「フィロソフィー」は「哲学」を意味する言葉ですが、もともとこの意は「知を愛する」（フィロス（愛）とソフィア（知）が合成された言葉）という行為であり、文学部哲学科で本格的に学ばなくとも、人として誰もが行え、かつ行わねばならない営為です。そして、おやしギヤグをお許しただければ、「知（恵）を愛し、地（域）を愛

すること」が、文化や観光について考えるときには必要です。グローバル化する社会のなかで、ローカルなものが有する固有価値をも併せ忘れてはいけません。ローカルな固有価値の尊重が、グローバル化する現代社会のなかでもきつと活きてくるに違いないと思いますし、そのことがグローバル社会のなかで日本を訴える大きな力となるのです。

さて、前書きがあまり饒舌になってしまっただけで退屈ですね。そこで、本書の副題にもある「カフェでくつろぐ」ということについて記し、本文に入っていきたいと思います。

僕はカフェとは、単に飲食をするだけの場ではないと思っています。大げさない方かもしれませんが、そこはひとつのトポスではないかと思うのです。トポスとは人にとっての心理的空間であり、心象風景を彩る場所のことです。学生時代の恩師のひとりである山岸政行先生（他大学から非常勤講師でみえていた英語の先生ですが、その後ずっと僕にとっては大切な恩師でした）に僕はよく授業が終わると、喫茶店に連れて行ってもらいました（その頃は、今のようにカフェという言葉はあまり使われておらず、戦前からの名残のような言葉としての「カフェー」は少し意味合いが違っていました。僕たち学生は、サテンなどといったものです）。

山岸先生があるとき、このようにおっしゃいました。「君、本屋さんに行つて本を買ったら、まっすぐに家に帰るのではなく、まずお気に入りの喫茶店に立ち寄り、そこでページを開くようにしなさい」。私たちの頃の僕が、トポスという言葉をどこまで理解し実感していたかは怪しいのですが、そのときに僕は喫茶店の場所性を感じました。以来三十数年経つた今も、その場所性を感じ、喫茶店やカフェを愛用しています。すなわち、喫茶店・カフェとはそれを愛する人にとっては「第三の場所」なのです。しかしもちろん、それと併せてこの「第三の場所」は「社会的な場（ソーシャルプレイス）」であるということも忘れてはいけません。カフェとコミュニケーションづくりの専門家の入川ひでと氏も、その点を強調しています（「カフェが街をつくる」クロスメディア・パブリッ

シング、二〇一二年)。

また一九八九年にアメリカで刊行され、邦訳が待望されていたレイ・オルデンバーグの著作が『サードプレイス』として、二〇一三年の秋に出版されました(忠平美幸訳、みすず書房、二〇一三年。原題は、*The Great Good Place: Cafés, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community*)。この著は「第三の場所」が、ひとりの人からコミュニティ、そして地域社会において、いかに大切で不可欠、重要なものを改めて考えるための必読書です。

仮に「第一の場所」を家庭としたときに、そこはある意味で狭義の「くらしの場」です。また「第二の場所」は「仕事の場」ということになるでしょう。そして、ソーシャルプレイスとしての「第三の場所」は、「第一、二の場所」でくらし、生きる僕たちにとって、片時の非日常が感じられる再生産の場や、時として人間関係の緩衝剤となる場でもあるのです。また、「第一・二の場」では出会えないような人たちと邂逅し、あるいは情報交換もできる場でもあるのです。いうまでもなく、これら「第一、二、三の場所」はすべてが、僕たちにとっての広義の「くらしの場」です。今になって思えば、山岸先生はそんなことも若かった僕に、おっしゃりたかったのではないかと思います。

さて、そろそろ、前書きを閉じ本論に入らなければなりません。そこで、この本の趣旨や、どのような方々に読んでいただきたいかということを書いておきたいと思えます。修辭的にいえば、まさにカフェのような第三の本を書けないかということが執筆の動機となっています。「小説」でもなければ「専門書」でもない本。そして中学・高校生から大学生、そしてそのお祖父さん、お祖母さんまでが、眉間に皺を寄せずに、カフェや縁側でも気楽に読んでいただきながら、何かひとつでも感じ取ってもらえればと願いました。換言すれば、若い世代の人たちには、何かひとつでいいから伝えることができると、また熟年・団塊の世代の人たちには忘れていた何

かを、改めてひとつでもいいので、思い起こしていただければと念じました。⁽⁵⁾

先にも触れましたように、僕も大学で教鞭をとって久しくなりましたが、学生たちにとって九〇分間の講義のなかで、卒業後に最も印象に残ることの多くは、本論と本論の間をつなぐ余談（まさに「第三の話」、しかし本論と本論をつなぐ）ことは必須ですが）のような気がします。僕自身も小学生の頃から大学院修了までの少しだけ長めの学生生活を通して、ずっとそうだったように思います。

昭和四〇年代前半に若者たちが熱狂したあるアイドルグループ⁽⁶⁾（京都出身のバンド、ザ・タイガース、二〇一三年二月三日の日本武道館公演を皮切りになんとオリジナルメンバーで再結成されました）のひとりであった、瞳みのるさんという人がいます。彼は、芸能界引退後に慶應義塾大学に入学し卒業後は慶應高校の国語科の名物教師になりました。退職後彼は近著のなかでこのようなことをいつています。

（授業は）どんな方法をとっても、心の中に何かが残ればいいんです。授業なんてものは、何も残らなくて、たぶん面白い話だけが残ります。でも、それは決してマイナスではないと思うんです。それが残っていない教師はつらいでしょうね。⁽⁷⁾

さて、僕のこの本のなかでどれだけ「第三の話」を読者のみなさんに残すことができ、みなさんにとっての生活の場の本論となる「第一・二の話」に活かしていただけるかどうかはなほだ心もとないのですが、可能な限り頑張ってみたいと思います。

なお本文のなかでは、各部の末尾にコーヒープレークとしての【コラム】を設け、さらにその末尾には読者のみなさんと一緒に考えてみたいテーマを設定し、問題意識を共有できればと思っています。なお、副題にある

「まちつむぎ」という言葉について、耳慣れない言葉かもしれませんが、それも本文中で明らかにしていくつもりです。さあそれでは、みなさんと一緒に、カフェ談義を始めましょう。

二〇一四年如月、五八歳の誕生日の日に

淡海の畔に近い寓居にて、学ぶことを教えてくれたすべての人たちへのオマージュに代えて

井口 貢

註

(1) 柳田國男（一八七五～一九六二）、日本民俗学の創始者……などといわれることが多いのですが、わが国近代において「史心」を重視しながら、豊かな「詩心」とともに、「政策科学」の確立を求めました。したがって、彼が創始し試みようとした民俗学は、もちろん一部で今でも誤解があるかもしれないような、好事家の懐古趣味的なそれでは決してなく、「公共民俗学」であったと思います。本書工部の扉に引用しました折口信夫の一文は、まさにそのことを語るものではなかったでしょうか。

(2) 「まちつむぎ」とは、二〇〇九（平成二二）年の春にゼミ生たちと長野県飯田市でフィールドワークを展開し、地元の方々と交流するなかで学生たちの発案がきっかけとなって生まれた造語です。井口編著『地域の自律的蘇生と文化政策の役割』（学文社、二〇一一年）を参照してください。

(3) 柳田は、歴史教育において子どもたちに「史心」を育まなければならないと考えていました。

(4) 松田哲夫編『中学生までに読んでおきたい哲学①～⑧』（あすなる書房、二〇一二年）というシリーズ本があります。参考になるかと思えます。

(5) 二〇一三(平成二五)年は、作家司馬遼太郎の生誕九〇年に当たる年でした(一九九六年没)。文藝春秋はそれを期して、文春文庫のPR冊子を作成しました(池波正太郎も同年生まれで、二人合わせてのPRでした。池波は一九九〇年没)。そのなかで、作家の浅田次郎が次のような一文を寄稿しています。「(司馬は)読書を始めたばかりの中学生にも、四十を過ぎた職業作家にも同じ感銘を与える」。エンターテインメントとしての作品に限らず、仮に専門書でも本来はそれが「学問救世」と「経世済民」を目的とするものであれば、こうした姿勢は必要なのではないかと思えます。僕は大家でもなければ大学生でもありませんので、すべての世代に同じ感銘を与えることなど到底不可能ですが、今回のこの本はすべての世代にお読みいただき、それぞれの世代に応じた読後感をお持ちいただければと思います。

(6) ただし、メンバーの多くはアイドルであることよりも、ミュージシャンであることを望んでいたようです。その真骨頂ともいえる彼らの後期のコンセプト・アルバムが「ビューマン・ルネッサンス」(一九六八年)です。中学生だった僕は、この楽曲にとっても惹かれました。とりわけ、「忘れかけた子守唄」(ヴェトナム戦争へのプロテストソング)と「廃墟の鳩」(ヒロシマ、ナガサキへの鎮魂歌)が秀逸だと思います。本文中でも少し触れますが、僕は政策学部の同僚の多田実さんと飯田在住のミュージシャン兼まちづくりプランナーの桑原利彦さんと組んで「KIT-01」というネオフォークロック地域活性化バンドをやっていますが、そのライブではザ・タイガースへのトリビュートの意を込めて、必ずこの二曲はカヴァーしています。

(7) 瞳みのる『老虎再来』祥伝社、二〇一二年、二二頁。

* 本文中も含め、文中での敬称はあえて必ずしも統一してはいないことと、故人については原則として省略してあることをご了承ください。また、本文中に掲載した写真は、「01」と「10」を除きすべて筆者撮影です。